# しのびぐさ

高橋　スミ

一月十二日。年々迎えるこの日は結婚記念日、母の忌日、今年で五十八年になる。鈴木商店の人にお嫁にゆければ一生の果報と言われる頃、其の頃門司市大里製糖所に勤務して居た高橋半助に婚姻を仲介して下さった製糖所の所長人見一太郎氏のお言葉にすがって、未だ十八歳の私、其の話のきまって間もなく高橋は満州へ派遣されて一年近く帰れず、やっと十二月に帰ったので明くる明治四十年一月十二日に、日比谷の大神宮で式をあげる事になり高橋は其の為に上京しました。

其の時母は病床にありました。母は十八の時に姉の残した四人の子、父とは二十程も年のちがう家へ嫁ぎ子供を八人産み、十二人の子持で末の娘の九女の私の二歳の時に父は病死しました。

それからあらゆる艱難をつづけ、末の娘の私の結婚までたどりついたので高橋の満州から帰るのを待ちかねたのです。そして其の結婚式をあげる一月十二日をどんなにたのしく待ちましたことか。

其の日どこまでも武士かたぎの母は、新藤五国光の短刀を私に渡し、この家はもうそなたの家でない。高橋の家で不調法して出されるような事があったら、この刀でいさぎよく命をたてと涙ながらに申し渡し、父の位牌にいとまをさせました。それが一生の別れでした。

式が終って日本橋の島平の高橋の宿へ姉達と着いて間もなく、母がキトクの電話がかかり一同急ぎ車をつらねて麹町の家に着いた時には、式場から一足先に帰った姉に抱かれて命はたえていました。昼出る時はそんな容態でなく見送ってくれましたのに。無事に式終えた報告を兄から聞いてとても満悦し、女中に折の御馳走をわけてやり母も何かいただいて、これで安心した父にお話も出来ると、法華経を唱えて伏したまま息が絶えたそうです。感動の激しさに心臓麻痺をおこしたのでしょう。

其の時のその悲しさを拙なくつづったのを書かせて頂きます。世には烈婦賢婦節婦さまざまな勝れた婦人もありますから、吾が母などはかくれ沼の底の藻の花のような人にも知られぬ、とるに足らぬ存在ですが、不肖の私には過ぎた立派な女丈夫でしたが一生不幸な女でした。

懐往時作歌一首竝短歌

高ひかる日の本つ国、国民は皆もろ声に、みいくさの勝ことほぎて、明らけく治まる御代の、四十年の睦月の初め、吾はもよ十とかぞへて九つの年とはなりぬ、折柄のえにしのまにま、はろばろに海山こえて筑紫路に、離りゆく身の季の娘をかなしく思す、母そはの母は父なき、十あまり七の年月、沖の石の人こそしらね、かくれ沼のよそには見えず、うつそみのうきもつらきも、かしのみのひとつにおひて、剱太刀とごころおこし、めぐし子をおふしはぐくみ、さばへなすたつきにつかれ、たまきはるいのちもしらに、すがのねの長き日にけに、さね床に病みこやしけり、とつぎゆく日になりしかば、味織のきぬきよそひて、しづはたの帯むすびたれ、はれやかにいでたつ吾を、よびすゑてをしへたまはく、今よりのうつつの世には、汝が家はせの家のみぞ、こと家はありとおもふな、まがごとのあやまちあらば、なが胸をこもてさけよと、おしへましいましめまして、ひも刀吾にたまひて、母そはの母のみことは、みねなかしなげかひましぬ、むらぎもの心まとひて、ぬえ鳥ののよびぬれど、しかすがに時なりぬれば、ちゝのみの父の御霊を、おろがみついとままをして、門の辺にいづればいつか、むらしぐれ車のとばり、うちたゝくとばりのうちも、湧きいでてにはたづみなす、涙をしとどめかねつも、しきたへの、まそでうちぬれ、けはひつる頬さへひぢて、ひさかたの日比谷の原の、かしこきやほぎのむしろに、つつましく立ちつらなりて、とよみきのつきくみかはし、うたげさへことをはりつつ、おのもおのも家路にゆくと、むら鳥のむれてしをれば、たまづさのつかひはきたり、たまのをの今か絶えむと、まがごとのきこえしくれば、きもむかふ心も空に、せんすべも身もたましらずももしきのまるのうちゆも、和田倉の御門を入りて、桜田にいでゆく道も、千里にかあまりたるらし、玉ぼこの道の長路を、玉くしげ二つつらねし、小車のおそしとかこち、月もなき松の林を、たどりこしわぎへの母は、かなし子のそのかなしさに、今日までをつなぎてありし、いきのをのたえはてしてふ、朝にはみね泣きましし、その目さへそのみ口さへ、永久にとぢかたくむすぼれ、ゆゆしかも石と冷えつつ、床の上によこたはります、みすがたのかなしき見ては、声たてて泣くことさへも、うちわすれただもだしつつ、家ぬちをいゆきもとほり、つまづきて身も世もあらず、袖もちて兄にすがれど、手をとりて姉にすがれど、今更にわづきもあらず、かなしかも母のみことは、吾がつとめまたくをわりぬ、まかり路をわれもまからむ、子の父も待ちてやまさむ、なかなかに病みてしあらば、嫁きし子の吾をおもひわび、事もかも怠りやせむ、まかり路を今しやすくと、法華経を口ずさみつゝおだやかに逝きましぬとふ、新夫はならびてあれど、言をさへわがいひがてに、あまさかるひなのさかひの、しらぬひのつくしのはてに、明日よりはつれたちゆかむ、そこ思へばなぎさはなれし、捨舟の波のまにまに、さまよはむゆくへいかにと、かにかくに心みだれし、かなしみのありしむかしを、などわすれめや。

たくもおもほゆるかも

忘れ得ぬこの時母は五十九、高橋は二十六私は十九、父の十七年でした。こんな古めかしいねごとのようなこと言ってはづかしいことながら一月十二日はまざまざうかんでまいります。

こうして門司に一年余りそれから神戸に二年程脇ノ浜から下山手通りに住み長男準一を産む。田宮の奥様に母のようにして頂きました、お家さんはハイカラがおきらいでいちょうがえしに髪を結って御挨拶にお伺いしました御別荘へお正月には歌留多の会にもまいりました、柳田のおむらはん金子のお徳はんおすみはんと呼ばれたなつかしい思い出、あかしやのおとしさんとやら言ったおばさんがやっちゃらまかせのよいやまかせ、と踊り出したこともありました。

遠き日の遠き念ひを埋火に

神戸ではたのしいこともありましたが柳田様のお葬式があって悲しい思い出もあります。

それから大阪へここも二年たらずその間に二男正雄を産みまもなく名古屋へ、名古屋は四十余年、五人の子供を名古屋で産みました。お家さんに名古屋でお目にかかった時おすみはんはいつでも腹ぼてやな、と笑われました。

四十年の間に高橋の大病、私の大病、子供二人を亡くし漏電で火事にあい、戦災で何もかもうしない鈴木商店のかなしい時も名古屋で体験した、昭和二十九年十二月十七日に四ケ月の病気でけぶる時雨にはらはら柳ちる日七十三で高橋は他界いたしました。

柳ちる日のかなしさは人に言はず

五十年近く平凡な生活の幕をとじました。納骨に帰りましたこの高橋の故郷にお墓守と仏事ばかりしていつか十年になります。他国者と言われても平気で神妙に郷に入って

泉湧く背の故郷に還り来て水に従ふいのちしづかに

孝行な子供達に優遇されて安楽に暮らさせて頂く私は本当に倖せな婆々です。これも鈴木商店のおかげ、高橋のおかげと旧宅を守り美しい雪嶺に向って心しづか　朝に晩に普門品唱えお墓まいりは私にあたえられた仕事としてつづけます。

笹鳴や吾が墓の文字二字赤く

平凡で過したなつかしい昔をうちしのびながら、返り花しづかなる日をふるさとに。

（鈴木商店名古屋支店長　高橋半助氏未亡人）

## 五季

福田　豊丘

太りゆく夜毎の月よ松の内
藤棚をこぼる陽ざしわれに来し
せり上りせり上りくる夏の山
天の川明治大正昭和かな
風花や西大谷の墓どころ

## 反歌

しらぬひのつくしのわだのあたたけき母のみ心いつか忘れむ

あら玉の年は来往けどはゝそはの母の心の忘らえなくに

そのかみのみこと思へばむらぎもの心い